

柳川さげもん民俗誌：手芸コミュニティと民俗技術 の創造的継承

坂元，一光
九州大学大学院人間環境学研究院国際教育環境学講座：教授

<https://doi.org/10.15017/2230703>

出版情報：大学院教育学研究紀要. 21, pp.1-23, 2019-03-29. 九州大学大学院人間環境学研究院教育学
部門
バージョン：
権利関係：

柳川さげもん民俗誌

— 手芸コミュニティと民俗技術の創造的継承 —

坂元 一 光

はじめに

福岡県柳川市の季節行事「雛祭り」では、通常の雛人形に加え、地域の伝統手工芸（手芸）の柳川毬と手芸細工（ちりめん細工）からなる華やかな吊るし飾りが付随し、当該行事に独自の地域特性を与えている。「さげもん」と呼ばれるこの吊るし飾りは、本来、雛祭りの期間中のみ、初節句の女兒のいる家庭の雛段の周囲に飾られる手芸細工であり、現在は一年を通じ観光客の目を楽しませる地域の伝統手工芸となっている。さげもんはもともと初節句祝いの贈答品として手作りされたものであるが、近頃では既製品のさげもんを購入する人も増えつつある。近年柳川では地域振興策の一環として雛祭り行事の観光化が積極的にすすめられており、さげもんは観光客向けの土産品としてもその需要が拡大している。さげもんとその習俗が観光化や商品化の文脈を与えられることによりさげもん作りをめぐる新たな社会的需要と市場が生みだされている。またこれにともない地元女性によるさげもん作りが地元の婦人会や文化サークル、手芸店の教室、個人宅の集まり等において年間を通じて盛んにおこなわれるようになってきた。そして何より注目すべきはこれら女性たちの手芸活動が単に個人的な趣味の領域に閉ざされてあるのではなく、地域の新たな文化創造や社会経済的活性にも開かれている点である。柳川の女性たちの手芸活動はさげもん習俗とその継承を伝統のモノづくりの側面から支えており、また地域に展開する様々な手芸コミュニティ⁽¹⁾における技法や様式の改良や多様化を通じて、さげもん作りの民俗技術⁽²⁾の継承にも重要な役割を担っている。本論では柳川の女性たちの手芸コミュニティに着目することによって、彼女たちの活発な伝統手芸活動が柳川のさげもんとその習俗を文字どおり「地域に根付いた」ものにし、またそれを支えるさげもん作りの民俗技術の創造的継承を促している様子を紹介する。

雛祭りとはさげもん

1. 柳川の雛祭りとはさげもん

柳川市域の雛祭り行事は雛人形とともに華麗な「御殿（柳川）まり」と手芸小物から構成される「さげもん」の吊るし飾りによって特徴づけられる（白石2006）。初節句を迎えた家庭では、華やかな手芸細工のさげもんが雛人形の壇飾りの左右にすだれ状に吊り下げられ、ただでさえ華やかな祝

いの空間にさらなる彩りを添える。



写真1 「家庭のさげもん（市内）」(H20)



写真2 「さげもんの細工物」(H21)

柳川の雛祭り行事は、さげもん飾りをともなう点を除けば全国的に見られるものほとんど変わりはない。柳川の年中行事をまとめた『柳川歴史資料集成第6集：柳川の民俗概観』からは地区を超えてほぼ共通する初節句の様子がうかがわれる。女兒の初節句は新暦の3月3日におこなわれる。嫁の里方から雛人形とさげもんが贈られる。雛人形のほかにこの地方では「ごんたさん」と呼ばれる市松人形もよく贈られる。ごんたさんには宮参りのときの着物が着せられる。そのほか這人形や嫁入り道具を模した一組の小さな布団、丹前なども飾られる。普通、節句の一ヶ月前から飾り始め、節句の日には親戚をよんで祝いの膳をもうける。赤飯や菱餅をつくって近所にふるまうこともあった。またこ

の日は知らない家にも上がって雛人形を観ることができ、とくに子どもたちは家々をまわってお菓子などの土産をもらっていた。こうした祝いは原則として長女のときだけとされる。

2. さげもんの構成

さげもんには竹で作った輪の下に等間隔に三本の糸を下げ、それぞれの糸に七つの手芸細工（まりを含む）を下げる。中央には大きな「御殿（柳川）まり」を二つ下げる。まりと細工物からなる合計で51個の飾りから構成されている。そしてこれを二さげ一対用意し、お祝いとして贈る。細工物の種類や個数は、今でこそ明確に説明されるが、古くからの決まり事というものではない。「柳川雛祭り・さげもんめぐり」と銘打った観光事業が定着するにつれて、外部の観光客を意識した公式の説明（「伝統」）として定められていった。紅白の竹の輪に吊り下げられたまり、動植物や人形の手芸品には、子どもの無事成長と幸せを祈る親たちの期待が込められている。これらのさげもんは初節句を迎えた女兒の母親や祖母、近隣・親戚の女性たちが手作りで準備し、祝いの品として贈られてきた。

さげもんの基本構成（中央の大鞠二個を除く）

	1	2	3	4	5	6	7
1	みかん	まり	ひょうたん	まり	いちご	まり	貝人形
2	まり	おかめ	まり	さる	まり	つる	まり
3	赤ちゃん人形 (女)	まり	せみ	まり	ききょう	まり	ちょうちょ
4	まり	桃	まり	カナリア	まり	赤ちゃん人形 (男)	まり
5	にわとり	まり	うさぎ	まり	ひよこ	まり	宝袋
6	まり	三番叟	まり	ねずみ	まり	金魚	まり
7	這い人形 (男)	まり	這い人形 (女)	まり	這い人形 (男)	まり	這い人形 (女)

<「柳川伝承まり・さげもん研究会」資料>

さげもんの細工物には女兒の産育をめぐるさまざまな観念や期待が込められている。さげもん輪に吊り下げられた動植物や人形の手芸品には、それぞれ女兒や子どもへの願いや期待がシンボリックに表象されている。女兒の成長に関わる細工物としては、例えば下記のような形象が見いだされる。

- 鼠 ……………子沢山
- 金魚、蝶 ……………艶やかさ
- 鶏 ……………早起き
- 蟬 ……………忍耐
- 蛤 ……………二夫にまみえず
- 唐辛子 ……………虫（わるい男）よけ

また下記のように女兒だけでなく子ども一般の成長や幸福をねがう形象もある。

猿 ………災厄除
ひよこ ………あどけなさ
うさぎ ………快活
鶴, 海老 ………長寿
瓢箪 ………無病息災
這い人形 ………成長

個々の細工物の解釈には諸説あるが、基本的には子ども（女兒）に期待される資質や特徴および人生の幸福に関連する形象物から構成されている。またさげもんと歴史的に関連の深い「ちりめん細工」にも子どもの招福や魔除け、御守りや迷子札などや産育にかかわる品々が数多く見出せる（井上2009：166-181）。

3. さげもんの制作工程

以下に緒方（2006）のテキストの例を参考にさげもんの細工物とまり作りの工程を紹介する。

*細工物（いちご）作り

ここでは最も単純と思われる「いちご」を例に細工物作りの概要を示す。こちらは30分もあれば仕上げられる比較的簡単な作品の例である。

材料は赤字に白色水玉の布2枚、和紙2枚、緑色フェルト1枚、木綿糸（赤、緑）、道具は針、待ち針、断ちはさみ、のり、手芸用ボンド、型紙等を用いる。

制作手順は次のように進められる。型紙を厚紙で作る。赤線より0.5cm大きく和紙を切る。和紙のふち全体にノリを少しつけ、実の布の裏側に貼る。和紙と同寸に布を断ち、中表にして、赤線の0.5cm内側を縫う。赤線に沿ってのりづけした部分を切り落として、表に返す。口をぐし縫いして、おいしそうに見えるように綿をたくさん入れた後、縫い縮める。フェルトにヘタの型紙どおりの印をつけ、断つ。星形の中央に切り込みを入れ、長方形のフェルトを2つに負って切込みの中に入れ、手芸用ボンドで固定する。実にヘタを星止めでとめつける。

*御殿まり作り

材料は木毛（パッキン）、手芸用綿、しつけ糸、リリヤーン糸、ラメ糸、道具は、はさみ、ふとん針、糸通し、待ち針、メジャー等を用いる。

御殿まりは柳川の伝統手工芸であり当地の吊るし飾りを特徴づけている構成要素である。まりを美しく彩る刺繍の模様は多種にわたり、二つ花、六つ花、麻の葉、かがり花、のし等を基本的な図案としその基本図案ごとに多様なアレンジやデザインが派生する。以下に制作過程の概要を示す。

まりの土台（玉）は木毛（パッキン）を芯にして球状に成型する。より手軽な方法として発泡スチロール製の玉を用いることも多い。前者の場合、木毛を芯にしてその周囲を手芸用のわたで包み、

さらにその上から木綿の仕付け糸を巻いて球状に成型して土台とする。次に出来上がった土台の丸い表面上にラメ糸を用い「地割」(均等な区割り)を附す。まず待ち針を打ちながらラメ糸で均等に上下半球に分けたうえで(赤道と呼ぶ)、さらに上下の極(北極、南極と呼ぶ)を軸に縦方向に均等に分割し(4, 6, 8等分)基本分割をつくる。その上からデザインに合わせて適宜新たな極を定めさらに分割し、刺繍で埋めていく区割りが準備される。(刺繍の過程は省略)

4. 「手がきれい」

材料やデザインに関しては人それぞれ、あるいは制作グループごとにこだわりがあったりもするが基本的な制作手順はほぼ共通である。また技能に関して熟練者や指導者と一般・初心者の違いは、裁縫や刺繍の技術の精度とスピード、あるいはデザインの巧みさ、美しさにおいて評価される。刺繍の精度やデザインの卓越性に関しては「手がきれい」と評され、運針や制作の速さは「手がはやい」などの言葉が用いられる。

さげもんは御殿まりと細工物をつないでようやく完成する。出来上がったさげもんのサイズは高さ1メートル以上の大ぶりなものから30センチほどの棚かざり用のものまでさまざまである。

5. さげもん習俗の成立過程

雛祭りにさげもんを添える柳川の習俗の起源や由来については確かな資料がなく今のところ定説を得ていない。また古いさげもん飾りもほとんど残って(見出されて)おらず、柳川のさげもん習俗の由来を遡及することは困難な状況である。しかし、さげもん飾りを構成する手工技術の歴史や地元の基層習俗に着目することでその成立過程をある程度跡づけることができると思われる。さげもんが今のような華やかな姿をとるまでには、地元の庶民層の祝いのツルシ習俗(つるしの飾りの原型)や様々な手芸技法・技術が、女子教育の普及、近年の手芸の趣味活動化、雛祭りの観光事業化などの社会要因と相まって、相互に融合、再構築される過程があったと推測される(図1)。そしてそこからはホブズボームらの言う「創られた伝統」(ホブズボーム&レンジャー1994)の姿が見えてくる。

1) さげもんの原型

平成24年、25年と筆者は初節句の一般家庭を訪問する機会を得た。訪問しながら気付いたのは今風の華やかなさげもん飾りとともにより質素な手作りの吊るし飾りが飾られていたことである。それは毛糸を結んでつくった小さな人形を吊るしただけのもの、ヤクルトの容器を人形に模したものやペットボトルのふたを集めてさげたもの、折り紙の千羽鶴だけを吊るしただけのもの、紙細工の傘や色紙の花びらをつないだものなど、近年の華やかな細工物のさげもんとは異なる素朴な吊るし飾りであった。筆者はこれらを現行の華やかなさげもん飾りの基層を成す習俗と考えている。かつては畳などの材料に加工したいぐさの切れ端から作った傘や有明海のアサリの貝殻を繋いだものも吊るしていたという。これらのことから元々の庶民の雛祭り行事のさげもんは、今のような華やかなものではなく身近な材料を用いたより質素な吊るしの飾りであったことが推測される。それらの素朴な吊る

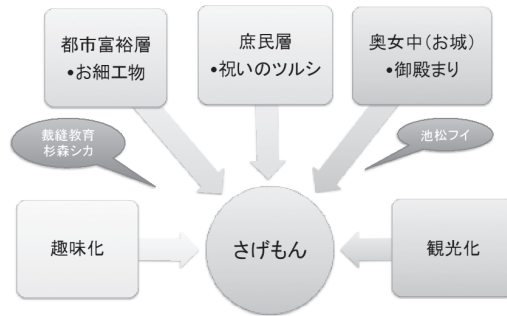


図1 「さげもんの由来」

し飾りの慣習をもとに今の華やかなさげもんが生み出されたと考えられる。

2) 御殿まり

さげもん飾りの重要な一部を構成する御殿まりに関しては、城内の奥女中のたしなみであった御殿まり作りが時代とともに一般女性の手芸活動の中に引き継がれ、現在のさげもんに取り入れられたと考えられる。この御殿まりをさげもん飾りに組み入れることは、他の地域（東伊豆や酒田）の類似の吊るし飾りにない柳川の特徴を生み出すことになった。

3) 江戸期お細工物文化

さげもんの主要な構成要素といえる多彩な細工物に関しては、日本の伝統的民間手芸の一つ「ちりめん細工」の延長上に位置づけることができるだろう。「ちりめん細工」の復興・普及に取り組んでいる井上重義は、柳川に伝わるさげもんに言及しつつ、江戸期の富裕層の女性の間で作られていた「裁縫お細工物」との関係を示唆している。縮緬の着物の端切れを用いて作られたお細工物は、袋物（香、琴爪などの入れ物）、玩具、御守り、女性のアクセサリとして江戸期の富裕な武家や商家の女性の間で作られはじめた（井上2009）。この時代には商品経済の発展とともに太刀袋や巾着、煙草入れなどの袋物を専門的に製作する「袋物師」が登場し、都市部の家庭の子女たちは公家社会の裁縫文化や職人の手による袋物の影響を受けながら自らお細工物作りに励むようになった。その後、お細工物作りは明治から大正時代にかけて女学生の家政教育の教材に用いられるようになる。着物の古着や端切れを再生利用するお細工物づくりには、当時の女性の儉約精神や裁縫の技術、あるいは女性的美意識を身につける格好の教材として期待されていた。こうした日本のお細工物文化は明治期の女子教育に引き継がれ、柳川のさげもん飾りにも取り入れられたと考えられる。

4) 地元女子教育による裁縫技術

現在の柳川のさげもん飾りと裁縫お細工物をつなぐ重要な契機として柳川の女子教育が挙げられる。『裁縫お細工物』をはじめとする明治期の裁縫教育のテキストには今日の細工物につながる型紙と制作方法が多数掲載されている（井上2009）。柳川においてもこの種のテキストが裁縫教育の教材として用いられ、今日のさげもんの習俗に影響を与えた。このテキストの柳川への導入過程に深く

関わっていたと考えられるのが、柳川初の女子職業教育機関である私立「杉森女芸学校」とその伝統を受け継ぐ現在の「杉森学園」である。学園の創始者である杉森シカは東京の共立女子職業学校で最新の裁縫教育を受けその成果を柳川に持ち帰った。杉森シカによる最初の私塾「杉森女紅会」およびその後の「杉森女芸学校」での裁縫教育は手芸技術を身に付けた卒業生を多数輩出していった。杉森女学園で手芸を学んだ卒業生たちは、少なくとも戦後すぐの時期には、和裁の教材としてさげもんにさげるまりや細工物を作りこれを文化祭で即売している（『杉森百年史』）。柳川市中に流れたまりや細工物が現在のような華やかなさげもんの形態に影響を与えたであろうことは想像に難くない。以上のように、現在の華やかなさげもん習俗やさげもん飾りは、柳川庶民の質素な吊るし飾り習俗を基盤に、地元の伝統的御殿まりと日本の伝統的手芸文化「ちりめん細工」が融合して誕生したと考えられ、それに必要な手芸技術の地域への普及には、地元的女子教育が大きな役割を担ったと考えられる。

雛祭りの観光化と二つの時間

柳川の一年を吊るし飾り習俗に焦点化して見ていったとき、それは大きく1) 初春の祝い行事として各家庭や地域イベントでのさげもんの展示と鑑賞を中心とする「愛でる」期間と2) 初節句の贈答や趣味と実益を兼ねた手芸活動のためにまりや細工物を制作する「作る」期間とに分けられる。二つの期間は相互に接しながら一年のサイクルを形づくっており、それらの滞りの無い循環によって習俗全体が生み出されている（図2）。独自のモノづくりを伴う柳川の初節句習俗は時期を定めた祝いの時空間での愛でる実践と人々の日々の手芸活動における作る実践によって織りなされている。なかでも観光雛祭りは愛でる期間を華やかに演出する一年でもっとも賑やかな初春のイベントであり、その後の作る期間における女性たちの活動をさらに活性させる役割を果たしている。

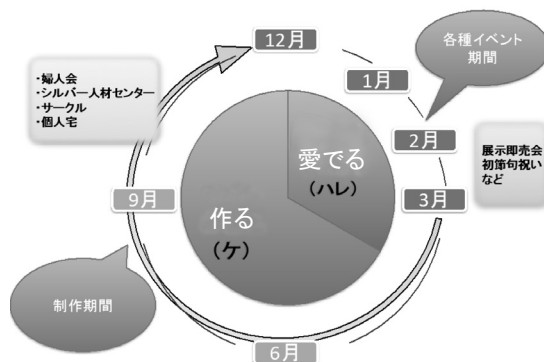


図2 「さげもんカレンダー」

1. 観光ひな祭りの誕生

柳川の観光ひな祭り「柳川さげもんめぐり」は地元習俗を観光イベントとして再構築したものである。それは柳川市内に招き入れた観光客が、市中のさまざまな場所に配置されたさげもんや雛飾りを「愛でる」ことを主な目的にしている。もともと家庭習俗としてあった初節句やひな祭りではこの期間、家人以外の客や近所の子どもたちを招き入れ飾りの前で簡単な接待をしていた。「柳川さげもんめぐり」はそうした歓待習俗を観光の文脈に置きかえたものともいえる。

平成6年、柳川地方は大規模な早魃を被り、観光の目玉である川下りが中止に追い込まれた。そのため観光客数がそれまでの年間110万人台から90万人台に激減し、主要産業である観光は大きな打撃を受けた。この状況を打開するため柳川市と柳川市観光協会、柳川商工会議所が郷土の伝統的習俗である「さげもん」に着目、平成7年から新しい観光の目玉として「柳川雛祭り・さげもんめぐり」のイベントをスタートさせた。このイベントにより減少した観光客の数は年々増加し、平成17年度にはかつての川下り中止以前の年間120万人台に回復した（表1）。

表1 柳川観光入込数

区分年（平成）	元年	2	3	4	5	6	7	8
入込客数（千人）	986	980	1,118	1,197	1,153	968	994	1,033
	9	10	11	12	13	14	15	16
	1,047	1,052	1,053	1,054	1,072	1,073	1,112	1,290
	17	18	19	20	21	22		
	1,203	1,255	1,218	1,171	1,156	1,159		

〔観光客入り込み客数調べ〕H23柳川市広報資料より筆者作成

柳川の観光ひな祭りは水郷柳川の観光事業として確立していた「川下り」とタイアップしながら発展した。「おひな様水上パレード」は、堀割りや船（どんこ船）を利用して、柳川らしい雰囲気醸し出し人気の高い行事である。川下り以外にも、「還り雛祭り」や、「流し雛祭り」などの堀割りをを使う祭りも、柳川のひな祭りを特徴づけている。ちなみに日吉神社を中心に行われるこれらの行事は、女性宮司と市役所観光課、観光協会が協力し企画された創られた伝統である。

2. 観光ひな祭りを構成する新行事

平成24年の「さげもんめぐり」の開催期間は2月11日から4月3日までとなっており、主要行事は1月28、29日の「さげもん展示即売会」（柳川市民体育館）、2月11日の「おひな様始祭」（日吉神社）、2月11日から4月3日の「ときめきひな灯り」（柳川商店通り）、3月4日の「帰り雛祭り」（日吉神社）、3月10日、11日、24日、25日の「初節句めぐり」（一般家庭）、3月18日の「おひな様水上パレード」、3月25日の「おひな様里親さがし」（日吉神社）、そして最終日の4月3日の「流し雛祭り」（柳川橋下流）などがある。

(1)「さげもん展示即売会」：柳川の女性たちが一年かけて準備を行い作りためてきたさげもんを展示販売する催しである。柳川のひな祭りの観光化はさげもん作りにも変化をもたらしている。そのひとつはさげもんの商品化である。近年、それまで手作りで準備されてきたさげもんを既成品として購入する人々が増えている。人びとは地元の女性たちによって作られた既成のさげもんを自分たちの子どもや孫のために買い求める。地元の女性たちの間ではその販売や贈答を念頭においたさげもん作りが盛んにおこなわれている。このさげもんの商品化や外部化（既製品化）を集約的にあらわしているのが、年に一度開催される大規模な即売会である。広い会場には色とりどりのさげもんが展示され、多くの観光客や地元の客が訪れ、鑑賞し、孫や子どもや自分のために購入する様子が見られる。（詳細は後述）

(2)「おひな様始祭」：約2ヶ月間に渡る「柳川さげもんひな祭り」の始まりを知らせる行事である（写真3）。このイベントは柳川のひな祭りが、観光イベント化された時から行われている。当日は、日吉神社において、神事が催され、その後3台の山車を使った市中パレードが行われる。1台目の山車には、日吉神社の宮司・巫女及び稚児が、2台目は五人囃子、三人官女、お内裏様に扮した大人たちが、そして3台目には稚児のみが乗りこむ。沿道には山車に乗った我が子の写真を撮る保護者たちの姿が多く見られる。約1時間、柳川市の中心市街地を練り歩き、柳川市立藤吉小学校においてパレードは終了する。

(3)「ときめきひな灯り」：柳川雛祭りさげもんめぐり期間中には、柳川商店街にまりと15センチほどの直方体の提灯がさげもん風に飾られる。1つの輪に3本の糸がさがり、糸1本につき柳川まりと提灯を5個ずつ交互にさげたものである。中央にはまりが2つさげられ、どの店舗でも同じ提灯を飾っている。またさげもん会館付近にある駐車場には3メートル四角のステージが設けられ、店舗に下がっているものと同じ提灯が複数さげられている。

(4)「還り雛祭り」：「還り雛祭り」は、還暦を迎えた女性が二度目の「初節句」を祝う行事で、市



写真3 「お雛様始め祭り」(H24)

内の日吉神社にて行われる。お祓いの後、形代流しを行い、神社に飾られたひな飾りを愛でながら白酒や桜茶をいただく。この「還り雛祭り」は女性の宮司の発案で平成7年から始められた新しい観光行事である。儀式のしつらえには女性宮司らしい感性や気配りが表れ、大人の女性のひな祭りという趣向が特色である。

(5) 初節句めぐり：これは初節句をむかえる家庭の協力をえて行う観光客を対象とした「初節句めぐり」のミニツアー企画である。実際に初節句を祝っている個人家庭がツアーに組み込まれ観光客には好評の企画となっている。ここでは3月10日のツアーの様子を記す。

当日は貸し切りのマイクロバスに乗り、三軒の家庭を一時間半ほどかけて見学した。柳川の初節句家庭においてどのようなひな人形やさげもんが飾られ初節句を祝うのか直に見学し話も聞ける。ツアー希望者はまず観光協会で申し込みを行う。1グループ定員9名である。筆者が参加した際は祖母と孫（女兒・祖母はよその土地に住むさげもの作り手）、観光客の夫婦、カメラが趣味の男性などの参加者であった。プライバシー保護のため、訪問先の住所などは公開されておらず、マイクロバスで行くため地元民以外は場所も特定しにくい。

訪問したのは5年ほど前に孫の初節句で公開しその見事な飾り付けが評判となり毎年公開を頼まれている家庭や、今年初めて女兒の孫が生まれ公開を頼まれた家庭、実家でなく夫婦の新築の家で初節句飾りをしつらえている家庭の三軒であった。華やかに飾られたひな人形やさげもんにはツアー客は感嘆の声を上げる。あれこれと質問をするツアー客に対して初節句の女兒を抱いた若い母親や父親がにこやかに受け答える。さげもんは赤ちゃんの母親の実家で用意し、祖母が手作りしたり、お祝いにもったりしたものである。なかには親戚知人から借りてきてさらにぎやかに飾っている家庭もある。伝統的な型式にこだわらず、飾ること、そして、見せることを楽しんでいる様子が伝わってくる。家庭によっては、お茶を出し、おみやげの菓子まで用意し、限られた短い時間のなかで心づくしのもてなしを提供する。公開する側の負担や手間は大変なものだが訪問客にとっては貴重な体験が得られる企画となっている。

(6) 「おひな様水上パレード」：柳川市内の稚児たちが船に乗り込み堀割りの中をパレードする。今年は十艘の船からなっており、一番先頭の船の先頭には神官が乗り込みお祓いをしながら堀割りの中を進む。船に乗っているには柳川市内の保育園・幼稚園の子どもや、一般公募で申し込みをした子ども達である。子どもたちはおひな様・お内裏様の衣装を身にまとい、岸に沿ってでは自分の子どもの姿を追う親やアマチュアカメラマンなどが船を追う。

(7) 「おひな様里親さがし」：古くて飾らなくなったひな人形をお祓いの後、必要とする人に引き取ってもらう行事である。観光協会や市役所の関係者が神社の入り口に集められていた人形を日吉神社の境内へと運び込む。運搬作業と並行にして、人形の展示、番号札付けなどの作業が進み、昼前後にはすべての準備が終わる。関係者と参加者の見守る中、神事が行われる。神事後、参加者は神社の入り口で入札券をもらい入場する。130点ほどある品物の中から、目当ての品に自分の名前を書いた入札券を置いてゆく。人気の品物はケースつきの段飾り、市松人形、羽子板、破魔弓セット、骨董風の五月人形などである。柳川鞠もすぐに引き取り手がきまる。

(8)「流し雛祭」：この行事は41年前から行われている。例年は子どもたちが舟に乗り、願い事を書いた短冊を川に流すイベントが行われる。当日は、天候不良のため、安全上の理由から舟を出すことができなかった。それでも、100名前後の子どもたちと保護者が集まっており、子どもたちは、小学校区毎に船着き場から、願い事を書いた短冊を直接堀に流す。

以上がH24年に催された「さげもんめぐり」の一連の行事である。今日の柳川のさげもん作りの活性の背景には、こうした雛祭り行事を地域振興の観光資源として活用する政治経済的な「仕掛け」を指摘できる。地域をあげて2か月間にわたり繰り広げられる数々のイベントでは、常にその中心に華やかなさげもん飾りが吊るされ、女性たちのさげもん作りにいやがおうでも活気を与えることになる。ただ女性たちを積極的な手芸活動に向かわせるのは、自治体主導の観光政策だけではない。そこには柳川の女性たちに学びや収益を通して手芸活動への意欲的参与をうながすローカルな流通システムの存在も見逃せない。

さげもんの流通システム

－「さげもん展示即売会」－

一連のイベントの先頭を切って開催される「さげもん展示即売会」は、先に指摘した柳川のさげもん習俗をめぐる二つの時空間、すなわち作る期間から愛でる期間への転換を可視化させるイベントである。そこではその年に作られたさげもん作品やパーツ等が一堂に集められ展示即売されるため、地域におけるさげもんの流通の実態や作品の傾向が一目でわかる。また作り手にとっては多様な技術を学ぶ場であり作品の出来栄を競う場にもなっている。展示即売会はひとつのローカルな流通システムとして女性たちの誰もが自由に作品を売買できる場を提供している。このように女性たちは趣味活動の延長上にさらに実益も期待できるのだ。

1. さげもん展示即売会への出展風景

－「柳川市婦人会」と「柳川市シルバー人材センター」－

平成24年度の展示即売会は「柳川市市民体育館」において二日間（1月28日（土）・29日（日））にわたり開催された。そこでは地域で最大のさげもん制作団体として知られる「柳川市婦人会」と「柳川市シルバー人材センター」の会員たちが一年間にわたり作りためたさげもんが展示、即売される。なお即売会で売れ残った作品は、婦人会が市内の婦人会館で、シルバー人材センターは駅前商店街の空き店舗を使って引き続き3月末日まで販売される。

即売会場で販売されている品はさげもんが中心であるが、婦人会やシルバー人材センターの手芸活動のなかで作られた他の手作り品（アクセサリ、実用小物、手芸品など）なども大量に陳列され販売される。会場は二日間、初節句のさげもんを求める客やその他の手芸品、小物類を買い求める地元客でごったがえす。さげもんを求める客は品質がよく値段が手ごろな品を買い求めるために早めに会場を訪れる。婦人会のさげもんの中には一つ一つに制作者の名前と値段を書いた紙片が下



写真4 「さげもん展示即売会」(H24)

がっているものもあり、そこには手作りのさげもんが単なる「商品」から「作品」へと移行する様子が見られる。名の知れた制作者のさげもんになると一連で4～5万円近くの値がつく。普通、左右一対で飾るためこうしたさげもんを揃えると10万円近い価格になる。即売会も二日目（最終日）ともなると大部分のさげもんには売約済みの札が下がり、その人気の高さをうかがわせる。初節用のさげもんは市中の人形専門店でも購入できるが、値段の手ごろ感と製作者の顔の見える手作り感、そして品数の豊富さが即売会の人気の理由になっている。

即売会前日にはさげもんの搬入がおこなわれる。会場の柳川市民体育館を半分に区切り、片側が各地区の婦人会、もう片側にはシルバー人材センターの展示スペースが設置される(写真4)。作品が体育館に次々と搬入され、担当者の指示により、手際良く展示される。即売会当日は寒い朝にもかかわらず、開始時刻前から大勢の人が体育館の入り口で並び、開場を待つ。入場開始の合図とともに人々がどっと会場内へ流れ込み、大きな段ボール箱に用意されたスリッパが足りなくなるほどの賑わいである。

買い物客は中高年女性や男性も多く乳児を抱いた若い母親と夫、両親という家族も見られる。柳川市内からだけでなく、筑後地方全体また県外からの入場者もある。近年は贈り物ではなく自分のために購入する中高年の女性も多いという。この展示即売会は、さげもんでなく、まりや袋などのパーツ類が多く売られている。作り手は常にさげもんひとさげをすべてひとりで作るわけではなく、ここで仕入れたものを自分の作品に取り入れて作ることも多い。即売会はパーツ売買の場の役割も果たしている。結果としてひとつのさげもんの中に複数の作り手の品が混在することになり柳川のさげもん作りの大らかさを示している。

婦人会のスペースのさげもんの展示作品の総数は150さげ程であった。他にまりや小物、古布の販売もされている。1. 柳河地区 2. 城内地区 3. 矢留地区 4. 東宮地区 5. 両開地区 6. 昭代地区 7. 蒲池地区 8. 大和地区 9. 三橋地区、の9つの地区がそれぞれ展示スペースを

分け売り場を管理している。全体のとりまとめ・調整役は柳川市地域婦人会連絡協議会が務め、地区ごとの管理は各地区の婦人会長が行う。販売担当者は各地区から時間交代制で割り当てられているが、自分の作品の説明をするためにそこにいる作り手も見られる。作品は自宅で作られたものもあれば、各公民館でのサークル活動で作られたものもある。

さげもんの価格はひとさげ4千円の小さなものから6万円まで様々である。ちりめんの着物地や古い帯、絹糸を使ったまりなど、高価な材料でこだわりを持って作られた作品もある。伝統の作り方にのっとったさげもんには、婦人会が発行した「柳川伝統「さげもん」認定証」が貼られていた。個性豊かなさまざまな作品が並ぶ婦人会の売り場はとても華やかで人の出入りも多く始終にぎわっている。

次にシルバー人材センターの展示スペースの様子である。さげもんの展示作品の総数は、80さげ程で、さげもんの他にまりや小物、人形なども多く展示されている。人材センターの展示場では出入口にレジが設けられ、会計が一ヶ所にまとめられている。販売担当はシルバー人材センターのスタッフが行う。シルバー人材センターでは定期的にまり作りと細工もの作りの教室が開かれており、そこで作られたさげもんや手芸小物が売りに並べられる。作家名はなく作品には番号札がつけられレジ横の台帳で管理されている。展示されたさげもんの価格は4千円から3万9千円まで様々であり、ひとさげ3万円前後のものも多い。婦人会スペースに比べ人の出入りはやや少なめだが、シルバー人材センターの作品を目当てに来る人も多く、2日目が終わるころには売れ残りはわずかになっていた。

即売会の位置づけ

展示即売会は地域内外の客の目を楽しませるだけでなく、制作者の女性たちにとって各種手芸コミュニティへの参加と制作意欲を高める場となっている。またそこは地域におけるさげもん制作の成果が集約される場であり、即売会が終わるとすぐに2か月間の観光ひな祭りが始まる。その意味で即売会はさげもん習俗の年間サイクルの「愛でる」期間と「作る」期間を区切る節目のイベントである。

民俗手芸のコミュニティ

現在の柳川のさげもん習俗をモノづくりの側面において支えているのは初節句家庭ではなく地域に広く展開する様々な手芸コミュニティである。それらは自宅や手芸品店の集まり、公共の手芸サークルや社中の制作集団まで様々な形態をとって活動している。女性たちは各人の目的や状況に応じてこうしたさげもん作りの場に参加している。かつての手作りの祝い品が時代とともに既製品化、商品化し、結果ちょっとした小遣い稼ぎや副業と結びつき、また趣味活動や生涯学習の教材として広く活用されるようになるにつれて、地域の手芸活動は活発化し様々な手芸コミュニティが生み出

されることになった。

加えて、当地の女性たちをさげもん制作に向かわせる要因として、社会経済的背景だけでなく手芸活動それ自体が持つ身体レベル、感性レベルの快美感覚についても指摘しておきたい。女性の伝統行事を彩るさげもん作りは、色柄物の端切れや刺繍糸を用いるという意味において作り手の意欲を引き出す快美感覚をともなっている。また加工し易い柔らかい材料（布や糸）やリズムミカルな運針作業など女性にとって親しい身体感覚もともなっていると考えられる。さげもん作りに内包されるこれらの身体的、感覚的特徴は、観光客らの熱いまなざしとも相まって、地域の女性による意欲的で積極的な参与をうながしているといえる。

女性たちのさげもんの制作活動は地域に広がる様々な手芸コミュニティに見出すことが出来る。以下では今日のさげもん作りの活況に関係の深い手芸コミュニティと手芸活動をその性格や形態ごとに分けて紹介していく。はじめはさげもん作りの技術や様式を主導し現在の習俗の在り方にも大きな影響を与えている「社中的」なさげもん制作集団とその活動である。社中的制作集団では高い技能と個性をもつ一人の指導者のもとに理念や規範に共鳴する生徒や弟子が集まり共同で制作活動をおこなう。その数は限定的ながらも作品の完成度や独自性においてさげもん作りの評価のひとつの参照軸としての役割を果たす。また伝統的な技術や様式についての言及を通じてさげもんの「伝統的真正性」の議論にも影響を与える存在である。

1. 初期の手芸コミュニティ

－「柳川まり保存会」－

現在、柳川で見られるさげもん制作集団は、特定の理念や趣向、また目的等を共有しながら多様な形態をとって活動している。なかでもさげもんの「伝統性」を強く意識した社中的手芸コミュニティが北島ミチ（大正3年生、故人）を中心に創設された「柳川まり保存会」であり、またそれを引き継いだ姪の緒方文香氏による「柳川伝承まり・さげもん研究会」である。この二つのグループはさげもん作りの技術や素材等に関して自覚的、意識的に「伝統」の維持と連続性を重視しており、多様な展開を見せる柳川のさげもん作りの現状を俯瞰する際の基点の役割を果たしている。「柳川まり保存会」を立ち上げた北島ミチ氏は戦後、外地から柳川に帰るとかつて立花家の奥女中を務めた池松フイ氏（明治20年生、故人）からまり（御殿まり＝柳川まり）の手ほどきを受けた。彼女はまりの美しさや伝統としての貴重さに魅せられ、昭和35年に仲間たちと「柳川まり保存会」を設立し、自身は初代会長となった。保存会ではまりの他にさげもんの細工物も作っており、現在のさげもん解説の元になっている決まりごと、すなわち細工物の数やさげ方、種類、その意味などは彼女たちによってこの頃決められたと言われている。このような柳川のさげもん作りの基準が「制度化」されたのは、「柳川まり保存会」の創設時（昭和35年）の頃であると推測される。そしてこの「制度化」によってさげもんのいわゆる「伝統的」形態がかたち作られた。「柳川まり保存会」と「柳川伝承まり・さげもん研究会」は、基本的に北島ミチ以来の伝統の制作スタイルを共有しており、細工物の数や種類、さげ方の順番などの他、草木染の糸を用いるまり作り、接着芯の用法、また子ども

のための祝い品というさげもんの伝統的用途を意識し、細工物には由来の分かる古布や新品の端切れしか用いない材料選びなどにこだわった制作技法を重視している⁽³⁾。

2. 「柳川まり保存会」以後

－制作集団における伝統派と革新派－

「柳川まり保存会」にはその後のさげもん作りの多様な集団の指導者たちが参加していた。たとえば、現在東京を拠点に「つり雛工房」を運営しているつり雛作家の酒井愛子氏や「柳川まり保存会」二代目会長の北島妙氏、またパッチワークからさげもん作りを始めた「夢工房」の下田美知子氏も保存会に参加し、まりや細工物制作を学んでいた。その後、彼女たちは地域の制作集団の指導者として成長し、柳川のさげもん作りにおいて独自な特徴を生み出していった。彼女たちのまりやさげもん作りに対する思いや解釈の違いは、今日のさげもんの多様な形態（革新派）を生みだす源となった。

「つり雛工房」は時代や嗜好に合わせた自由で都会的な作風を取り入れ、まりや細工物の制法や材料もそれに合わせたものを積極的に採用している。たとえば発泡スチロール製の土台まりの使用、木目込み技法の採用、細工物の数や種類に関する自由度などを特徴としながら、生活様式の変化や吊り飾りの用途の拡大にそった制作技法を取り入れている。同じく革新派（創作派）に位置づけられる「夢工房」の場合も、さげもんの「伝統」の上に立ちつつも生活様式や嗜好の変化にそった新しい制作スタイルを展開している。とりわけその出発点がパッチワークであったところから古布の美しさや組み合わせの妙を積極的に取り入れた制作技法を特徴としている。

上に紹介したさげもん作りの展開及び流れを大きく整理すると、伝統派と革新派（創作派）に分けられる。伝統派はいうまでもなく「柳川まり保存会」や「柳川伝承まり・さげもん研究会」の制作スタイルであり、保存会設立時に確認され、共有された「伝統」的制作スタイルを継承しようとしている。これに対し「つり雛工房」や「夢工房」などの革新派（創作派）は、その「伝統」の上に立って作家の個性や時代の嗜好を反映させていこうとする制作スタイルをとっている。

3. 公共施設の手芸コミュニティ

柳川には社中的手芸コミュニティ以外にも公共施設や団体が生涯教育の一環として準備するサークル活動や同好会系の手芸コミュニティも多い。そこには技術的指導者はいるが先生と弟子のような形式的、継続的な関係性はなく、社中的手芸コミュニティと比べると組織としての凝集性、階層性、理念の共有等が緩やかで広く一般市民に開かれた手芸コミュニティといえる。ここではその代表的な例として婦人会のさげもんサークルとシルバー人材センター手芸同好会の活動を見ていく。

① 婦人会のさげもんサークル

市内にある8つの婦人会の内、規模が一番大きいS婦人会の様子を見ていく（平成22年5月24日、写真5）。今年度の婦人会の手芸教室は5月に始まっており、月二回月曜日に行っている。学校の夏



写真5 「婦人会手芸サークル」(H22)



写真6 「人形の細工物」(H22)

休み期間を除いて12月まで半年間の活動である。この期間中に作られたさげもんが「さげもん展示即売会」で展示・即売される。手芸教室に入っている会員らにはさげもんを作った経験のない初心者の者もいれば、ベテランの者もいる。年齢的には、仕事や育児が終わって時間の余裕がある60代前半から70代後半の中高年女性で占められている。訪問当日の手芸教室には14人が集まっていた。そのうち、さげもんを作った経験のある人は2人、他の12人は初心者である。講師は、美容室を営み若い頃からさげもん作りにたずさわっていた60代の女性である。

今回の手芸教室では、傘型の小ぶりなさげもんの制作を目標にしていた。一回目は人形作りであった。早めにやって来た参加者が手慣れた様子で公民館の長机を持ち出し12畳ほどの広間に口の字型に並べていく。時間になって参加者が集まり講師も到着する。特に挨拶もなく材料を配りながら、

材料費を集め、解説が始まる。講師は人数分の材料を準備し、その場で自分でも作業を進めながら、作り方を教えていく。講師が参加者たちの間を見て回ることもあるが、参加者たちが講師のところ質問に行く姿も見える。参加者は用意されてきた型紙で人形の各部分（パーツ）の形を切り取り、糊付け、縫い、アイロンがけなどひとつひとつの工程を手順にそってすすめていく。作業中は技術的なことだけではなくさまざまな生活の話題、冗談が飛び交い和やかな雰囲気包まれる。経験者は手際よく講師と同時に人形を完成させる。一方、初心者の中には予定されていた時間内（14：00～16：00）に完成できず、宿題として持ち帰る人もいる。終わり際に講師から、ここで作った人形をもう一度自宅で作ってみる、同じ作業を繰り返すことで作業に慣れ、上手に作れるようになる、などアドバイスがあり教室は終わる。

参加者の中には孫が生まれるから勉強し始めたという人もいれば、友人や知り合いの孫あるいは子どものお祝いに手作りの「さげもん」を贈るために始めたという人もいた。また興味を持つ者同士が集まって気楽に勉強できること自体を楽しみに来ている人もある。参加者の年齢や話から子育てや仕事が終わって自分の自由な時間が取れた頃合いを見計らって来ている人が多い。経験者は自分の技術をさらに磨き、また新しい技術を身に付けることを楽しみにきている。初心者は、焦ることもなければ、余計なプレッシャーも感じず自分のペースで作品作りを楽しんでいるように思われる。

このように婦人会の手芸教室は、手芸技術の習得によって地域文化を維持・伝承していく基盤となっているだけでなく、中高年女性の趣味生活を充実させる役割も果たしている。また、中高年女性の社会的ネットワークを広げ生活情報の交換の場も提供している。

②シルバー人材センター手芸同好会

婦人会や公民館の自主サークルのほかシルバー人材センターでも手芸活動を取り入れ、技術の相互学習や情報交換をおこない高齢女性の健康福祉の向上に役立てている（写真7）。

平成22年現在、柳川市シルバー人材センターは約700人の会員を数え、そのうち4割が女性会員である。センターでは「同好会」という名称で手芸教室が開かれており50人の会員が登録している。今年度の手芸同好会は5月に始まっておりひと月に一度の頻度で集まっている。婦人会と同様に、12月までの活動であり期間中に作られたさげもんが展示即売会に出品される。

訪問した日（H22年7月13日）は大雨のため参加者は少なかったが、それでも26人が集まっていた。この日は、「まり作り」の最後の回であった。5月から7月までの3回の学習計画は「まり作り」ということになっており、生徒それぞれ一年の目標（来年の展示・即売会）に向けた作品作りに取り組んできた。普段は同会の会員でベテランの参加者が教えているが、今回は2人の講師が教えに来ていた。これは毎回のことではなく特徴的なまり作りや新しいデザインに挑戦する時にだけ特別に講師を招いている。

手芸同好会では、婦人会の手芸教室と違って、材料は参加者がそれぞれ準備し持ってくる。集めた会費（300円）は当日の学習が終わった後の茶話会の費用に充てている。同好会では会長とセンターの職員が一人付いて世話をしている。教室はセンターの二階にあり明るく広い部屋が用意され

ている。参加人数に合わせて長テーブルを口の字型に二列に並べ人数分の椅子を準備する。時間になると参加者はそれぞれ席に着き、材料を出し作業の準備をする。二人の講師は前の席に座り、特に参加者の間を見回すこともなく自らも作業を進める。当日、参加者の中に初心者はいなかったが、今年で二年目という人も何人かいた。そうした経験の少ない参加者は講師にいろいろ教えてもらい色選びのアドバイスなどを受ける。経験者の多くは互いに相談しながら作業を進めている。

婦人会の手芸教室に比べ参加者の年齢は高く70代が多く実際の学習の様子も違っている。一人ひとりがテーブルに見本のまりを置いて作業に取り込む。二人の講師は聞きに来る学習者に丁寧に教える。なかには二つのまりを同時に作っている女性（77歳）もいる。一つは練習用で針を一針通し出来具合を見ながら二つ目の（本物）まりに針を通している。去年からこの手芸教室に参加しているが、自分が満足できる作品が作れるまでは展示即売会には出さなかった。「(未完成「まり」を見



写真7 「シルバー人材センター手芸同好会」(H22)



写真8 「持参の手芸道具」

せながら)もう少し頑張れば出来上がる。今年の展示即売会には自分の作品を自信持って出します」と話していた。

③手芸店の手芸コミュニティ

地域のさげもん作りには、社中の、公共的手芸コミュニティだけでなく、個人の都合に合わせて、比較的自由に参加することができるより小規模な手芸コミュニティも多い。それは個人の自宅を使った自然発生的な友人の集まりや店舗の一角を利用した数名規模の教室などである。例えばH手芸店は商店街のメインストリートに面し地域でもよく知られた店である。そこでは日によってまり制作と細工物制作が開催されそれぞれ講師も異なる。この日(H23年10月7日)は毎週一回のまり制作の教室で参加者は5名であった。地元に住居するU講師と手芸店の女性店主とお嫁さんの二人が助手をつとめている。手芸店は場所を提供するかわりに教室で使う材料を販売する。講習料は一回1000円で初回の材料費は作るまりの種類によって異なるが2000円から2500円程度である。手芸店では材料の販売だけでなく女性店主とお嫁さんの手によるまりや手芸細工も制作販売している。

参加者は全員女性で40歳台から60歳代まで年齢はさまざまで福岡市内からの参加者も1名あった。友人同士の参加者もあれば互いに見ず知らずの参加者もある。店内の中央に作業机が二卓ほど置かれており参加者はそれぞれ自分の好きな場所に座り作業を行う。無心に針を動かす者、取り止めのない会話を交わしながら作業をすすめる者などさまざまな作業風景が見られる。講師たちは参加者から質問があるとそのつど手短かに説明や指導をおこなう。もちろん参加者同士の教え合う様子も見られる。講師は参加者の針の差し間違いや失敗に対してもきわめて寛容な態度で接している。地元の方言を使って冗談を交えながらの授業で店内には笑いが絶えない。参加者の技術も初心者からベテランの常連までさまざまであり、講師は各人のレベルに合わせて指導している。初めての参加者は13時から16時までの教室で、すでにまりの土台も地割も準備された状態からの刺繍糸のかがり作業とはいえ、その半分ほどの工程を仕上げることができる。残りの作業は自宅で続けて完成させるのもよいし次回の教室に再度持ち込んでもよく参加者の都合に合わせて自由に選択できる。このような手芸教室を開く手芸店は他に市内に数店舗あり地元の女性を中心に婦人会やシルバー人材センターの手芸教室以外のより自由度の高いさげもん制作の場を提供している。

④次世代継承型の手芸コミュニティ：昭代第二小学校のクラブ活動

婦人会はその活動の一環として小学校を対象に柳川まり作りの体験学習のための講師派遣を行っている。この日(H22年2月10日)は女性会員(75)Tさんを中心に他の二人の会員が子どもたちに針の通し方、糸の色の選びなど基本的な作業の指導をしていた。そこには世代を超えた手芸コミュニティの姿が見られる。

昭代第二小学校は柳川市西部に位置し、筑後川と沖端川下流に挟まれた干拓地に広がっている。「郷土に誇りをもち、思いやりの心と考える力をもった子どもを育成する」ことを教育目標に立て、在籍児童数は220人である。柳川まりのクラブには9人の子どもが参加しており、そのうち1人は男

子、残り8人は女子である。

訪問当日は年度の最後のクラブ活動で、発表会に向けての作品作りの仕上げに取り込んでいた。子どもたちが発表会で展示するそれぞれのまりを作り上げるため、一針一針制作に余念がない。当日完成させることを目標にしていたが間に合わない子どもがいた。講師のTさんは自分で持ち帰って完成させることにした。「子どもたちが自宅に持って帰っても手伝ってくれる人がいないからね。このままでは未完成のまま終わってしまう。これまでの子どもたちの努力を無駄にしたくないし、あと少し手を入れれば完成できる。発表会の日、自分たちの作品を見た子どもたちも喜ぶし、見に来てくれた家族や地域の人たちも喜ぶ」と語っていた。

教室のボランティアの女性たちからは小学生への指導や活動を通じて得られる楽しみや喜びが伝わってくる。Tさんはその高い技術を買われて初節句の「まり」やさげもんの製作を数多く依頼されている。そんな忙しいなかを小学校に指導に来ている。しかし、Tさんをふくめ指導に当たっていた女性会員からは「自分がこのように学校で子どもたちに教えるとは思ってもいなかった。」「手芸をして誰かの役に立てること本当に嬉しく思っている。」「子どもたちが作品作りに行き詰ったとき「先生、先生、」と呼んでくれるのがとてもうれしい。」「子どもたちが自分の作品を一所懸命に作り、完成させたときの喜ぶ顔を見るのが楽しみだ。」などと学校で子どもたちに手芸を教えることの喜びややりがい語られた。限られた範囲や時間のなかでの次世代継承の取り組みであるが、さげもん習俗や民俗技術の継承を考えるうえで重要な手芸コミュニティのひとつといえる。

おわりに—Mさんのさげもん作り—

本論では柳川独自の雛祭り行事を支えている女性たちの手芸コミュニティに着目し、それが埋め込まれたローカルな社会的、経済的、そして歴史的な文脈との関係のなかで、当地のさげもん習俗や手芸の民俗技術が継承される過程について示した。彼女たちは地域の伝統や自治体の観光戦略を重く受け止めることもなく、自由で趣味的な手芸活動に生活の楽しみや充実感を見出し、またささやかな収入や作品の出来ばえに対する周囲の評価等を励みにしながら、能動的、主体的にさげもん作りに参画していた。そしてその参画の実践は当地のさげもん習俗や手芸の民俗技術が変化する社会状況に合わせて「地域に根づく」あり方を示すものでもあった。

最後に柳川のさげもん作りに関わる女性たちの積極的な姿勢や制作の喜びあるいは女学校教育との関わりを体現している一人の女性を紹介し本論の締めくくりとしたい(H25年9月6日訪問)。地元で「手がきれい」(技術が優れている)な作り手として知られるMさん(75歳)は現在、柳川市に接する隣県にあって制作を続けている。さげもん即売会にはその作りの精緻さや生地的美しさにおいてとりわけ注目を集める作品も数多く出展される。それらは値段も高価であるがその出来栄えにおいて際立っており毎年即売会の初日に売れてしまう。こうしたさげもんは彼女のような特に優れた作り手のものでありその出来ばえにおいて一般の作者のものとは一線を画している。彼女が柳川市外に居を構えながら柳川の婦人会スペースで展示販売しているのは、地元の婦人会の会員である

友人たちのつてがあるからだ。展示する側にとっても彼女の作品があることで地区のさげもん全体の評価があがりメリットは大きい。

彼女は柳川の杉森学園の出身（昭和32年卒業）でありそこで基本的な裁縫・刺繍の技術を習得している。その当時からまりや細工物作りが和裁の授業の中に組み込まれ、年に一度の学習成果発表会である秋の文化祭では、学科を越えて全生徒が一人6個ずつ2種類の細工物を作ってさげもんにし展示即売していたという。当時の記憶ではひとさげ3000円程で売っていた。実際、即売会には杉森出身者が多数出品しており、地元の古くからの実業（裁縫・手芸）教育と今のさげもん習俗との密接なかわりが浮かんでくる。

学園を卒業し隣県に嫁いだ後、長男の孫の誕生をきっかけに自宅でさげもん作りをするようになった。作り始めて10年ほどたった現在、まりも含めて1年間で6～7対（12～14さげ）を一人で制作している。年間平均80万円～90万円ほどの売り上げになる。多くは材料費に消えていくが、いくらかは収益として残るためそれも楽しみになっている。彼女によれば歳をとってからも自分の趣味でいくばくかの収入を得られるのはとても嬉しいことである。彼女のさげもんは材料にこだわった丁寧な作りと仕上がりの美しさにある。きちんとつくればその分10年、20年と長持ちする。使用する布には特に気を使い華やかで上品な柄や色のものを求める。そのため現在はよい布（端切れ）を探すために家族に手伝ってもらいインターネットも利用している。

彼女にとってさげもん作りの楽しみは制作過程や収入だけではない。自分の作品の買い手からの感謝の手紙や喜びの連絡が時々ある。その時は自分のさげもんを通して気持が伝わったようで作り甲斐を感じている。子どもの祝い品であるさげもんを作るときにはその子の身を守るよう気持やことばを込めながら針をさす。祈る気持が欠けると良いものを作ることはできない。だから展示会場で作品を入れたガラスケースが割れたりすると縁起が悪いとその作品の販売を控えるほどである。彼女は比較的近い（車で40～50分）とはいえ柳川を離れた嫁ぎ先でさげもん作りをしている。しかしさげもん作りによって自分と柳川の、あるいは友人たちとの関係が今でも結ばれていることに対してもさげもん作りにたずさわることの有難さを感じている。

* 本稿は平成23～25年度科学研究費補助金（課題番号23520989）の最終報告書（別冊）として準備された草稿の一部である。本文中にはその間に執筆した複数の論文（坂元2009）（坂元2010）（坂元2011）（坂元2012a）（坂元他2012b）（坂元2014）の一部を加筆、修正した内容が含まれている。なお記述内容等は調査当時のものである。

註

- (1) ここで用いる「手芸コミュニティ」とは、手芸という技術的実践を通して「歴史的に構築される状況の産物であり、常に変化している実践の活動領域」（平井2012：2）を指している。これは民族誌研究における田辺（2003）の「実践コミュニティ」概念から援用したものであり、

これまでの本質主義的、客観主義的な視点ではなく、あくまでも行為者の視点と地平からコミュニティ内部で進行する人びとの複雑な相互行為の過程を記述することをめざし再構築された概念である（田辺2003：138）。

- (2) さげもん作りは一般的な刺繍や裁縫の技術（汎用技術）に基づいているが、本稿ではその歴史社会的文脈に深く埋め込まれた刺繍・裁縫技術という独自のあり方をもってこれを「民俗技術」(folk techniques)と呼んでおきたい。
- (3) 現在「柳川まり保存会」は創設者北島ミチ氏の義理の妹にあたる北島妙氏が二代目会長をつとめている。

参考文献

- 井上重義2008「ちりめん細工の復興について」『ちりめん細工・春の寿ぎ展』（北九州市立小倉城庭園・講演会配布資料）
- 2009『江戸・明治のちりめん細工』（井上重義監修，尾崎織女解説）雄鶏社
- ホブズボーム&レンジャー1994（1992）『創られた伝統』前川啓治・梶原景昭他訳，紀伊國屋書店
- 平井京之介編2012『実践としてのコミュニティー—移動・国家・運動』京都大学学術出版会
- 緒方文香2006『夢香る：柳川伝承まり・さげもん作品集』，柳川伝承まり・さげもん研究会
- 坂元一光2009「子どもの民俗行事と地域の活性—柳川の観光ひな祭りと女性の「さげもん」細工—」『国際教育文化研究』第8号，pp.39-49
- 2010「日本の感性（Kansei）研究をめぐる素描—レビューとスケッチ—」『九州大学大学院教育学研究紀要』第12号，pp.31-47
- & アナトラ・グリジャンナティ 2011「ひな祭り行事の再構築と女性の手芸活動—柳川さげもん調査予報—」『九州大学大学院教育学研究紀要』第13号，pp.61-75
- 2012a「地域女性の学習資源としての手芸伝統—柳川のローカルな知をめぐって—」『九州大学大学院教育学研究紀要』第14号，pp.59-73
- 2012b，末廣真木，宮本聡，翁文静，吉丸梓，泉純子，藤原旅人，「吊るし飾りを伴う観光ひな祭りの比較—柳川，稲取，酒田における女兒初節句習俗の再構築—」『国際教育文化研究』Vol.12，pp.39-49
- 白石直樹2006「柳川の雛祭りと「さげもん」『雛のつるし飾り』（山崎裕子編）三弥井書店
- 杉森百周年史編集委員会編1995『杉森百年史』学校法人杉森女子学園
- 田辺繁治2003『生き方的人类学』講談社現代新書
- 柳川市史編集委員会2004『柳川の民俗概観：柳川歴史資料集成第6集』

Ethnography on Hina Dolls Festival and Women's Handcrafts Activities in Yanagawa

Ikko SAKAMOTO

In recent years, the administrative approach to invite tourists and create related industries through the use of folk culture and traditional events in tourism has become a national phenomenon. One example of such an approach is the tourism business of Girls' Festival on March 3 – a traditional girls' first seasonal festival held throughout Kyushu with the advent of the spring tourism season. Yanagawa City of Fukuoka Prefecture also participate in this festival; however, it has a unique feature of hanging numerous small, beautiful handicrafts called Sagemon made from silk crape (small-sized handmade stuffed figures, depicting animals and plants et) on both the side of the traditional girls' festival dolls. Sagemons, decorated along with girls' festival dolls, are time-honored craft tradition carried on in the local community, handcrafted by mothers and grandmothers of girl who are of the age to celebrate their first seasonal festival, wishing them happiness and sound growth. Today, the family celebration of Yanagawa has opened up to a wider region and tourists through the use of the Yanagawa girls' festival and the Sagemon displayed in that festival which have both been passed on as a local life ritual. Moreover, this change has resulted in an increased interest and demand for the Sagemons made by the local women.

Today, handicraft activities have spread among women as a leisure activity or hobby, but they are positioned as part of lifelong learning activities within social education. In the case of Yanagawa, Sagemon production has the characteristic of being a local social activity conducted collaboratively and going beyond the realm of personal leisure activities due to its direct and indirect involvement with tourism promotion.